かまだ

鎌田地区
令和７年９月１日現在
総人口　19,764人
（前年比　-255人）
世帯数　9,629戸
発行者　鎌田地区公民館
公民館報編集委員会

地震体験車がやって来た
体験して学ぶ防災の知恵

7月28日、鎌田地区公民館主催の「防災体験学習」が開催されました。猛暑の中、夏休み中の子どもたちや地域の方など200人を超える参加者が、さまざまな体験を通して防災への理解と備えの大切さを学びました。

メインは、長野県に1台しかない地震体験車。今回は、今後起きるといわれている糸魚川―静岡構造線による震度7のゆれを実感できる、貴重な模擬体験となりました。

「最初に小さく横にゆれたかと思うと、すぐに激しい縦ゆれになり、その後は立っていられず机の脚にしがみついているだけだった」「家の中にいたらどうなるのかと不安になった」「こわかった」など、多くの声が寄せられました。

子どもたちの中には「楽しかった」という感想もありましたが、それは安全であることを知っているから。家具の転倒防止など、備えの重要性をあらためて実感しました。

「身近な生活用品を使った応急処置」のコーナーでは、防災士の指導のもと、段ボールや割りばし、養生テープ、ネクタイなどを使ったケガの手当ての方法などを学びました。親子で互いに手当てを体験しながら、「ストッキングでも代用できそう」などの新たな発見もあり、工夫と柔軟な発想が災害時には重要であることを再認識しました。

「非常持ち出し袋の中身を考えよう」のコーナーでは、グループごとに35枚のカードの中から、必要と思われる9品目を話し合って選ぶというワークを実施。水、ラジオ、懐中電灯、衣類のほか、薬、宝石、化粧品、宿題などの品目も含まれていて、「人によって必要なものは違う」「自分では思いつかなかった品もある」といった気づきがありました。

段ボールベッドを実際に組み立てる体験や、防災グッズの展示も行われました。

体験してみて初めてわかることも多く、参加者一人ひとりの防災意識を高めるとても有意義な防災体験学習でした。

雑感

ここ数年「昭和レトロ」が若者の間でブームになっている。特に今年は「昭和100年」ということでマスコミも賑やかだ▼「降る雪や 明治は遠くなりにけり」は、中村草田男の昭和6年の句である。明治生まれの年老いた作者が、遠い昔の明治を懐かしんで作った句かと思いきや、当時作者は31歳。明治の終焉から20年ほどしか経っていない時期に作った句であった▼母校を訪れた作者が、後輩の児童たちの身なりの変容に衝撃を受けて詠んだ句といわれているが、明治から大正・昭和へと、わずかな期間に時代が動き、社会や暮らしが大きく変わったという背景があるようだ▼昭和も、戦争、復興、高度経済成長、バブル経済とその崩壊と激動の時代だった。さらに、平成の不況とデジタル社会への変貌を経て令和へ▼国民の約7割を占める昭和以前生まれの人々にとっては、今般の「昭和レトロ」ブームは、「右肩上がり」「一億総中流」の良き時代の懐古となっているようにも見受けられる▼「ゆく秋や 昭和も遠くなりにけり」（小山淳一）

平和を祈りながら七夕まつりを楽しむ

「松本の七夕まつり」が、8月1日に鎌田地区公民館で大勢の小学生や大人が参加して、賑やかに開催されました。

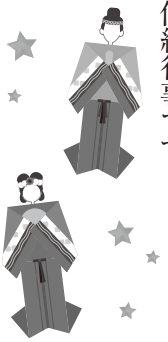
松本地方の七夕

はじめに「七夕」と「ぼんぼん」について学びました。

松本地方の七夕は月遅れの8月7日に行います。短冊を吊るした笹飾りをかざり、畑の作物と餡やきな粉で和えた「ホウトウ」を供えて食べます。軒先には、子どもの健やかな成長を願って着物掛けや紙の七夕人形をかざります。

「ぼんぼん」は、浴衣で提灯を持った女の子が行列して歌いながら町内を回る、先祖の霊をなぐさめる行事です。のちに男の子たちの「青山様」と一緒に行うようになりました。

どちらも、江戸時代から続く全国的にも大変珍しい松本の伝統行事です。



絵本の読み聞かせ

戦争と平和について考える「平和ってどんなこと?」「ちいちゃんのかげおくり」と、松本の七夕行事を題材とした「たなばたまつり」の絵本を図書委員が分かりやすく読み聞かせしました。

そのあと皆で松本の「ぼんぼん」の歌を歌い、「七夕饅頭」をいただきました。

七夕人形作り

子どもたちは紙びな形式の小さな七夕人形を公民館長や共催の皆さんに教わりながら丁寧に一生懸命作り「かわいくできた」「おうちにかざる」と嬉しそうに持ち帰りました。

鎌田地区公民館のロビーは、毎年8月に七夕まつりの笹飾りやかわいらしい七夕人形で華やぎます。

テーブルには「松本市平和記念式典」に献呈する千羽鶴を折るための折り紙が置かれ、福祉ひろばや図書館、児童センターでもたくさんの千羽鶴が作成されました。

これからも世界中の平和を祈りながら、松本の大切な伝統行事を楽しみ、のちのちまで広く伝えていきましょう。

鎌田の伝統野菜を身近に

カーブが特徴「松本一本ねぎ」

8月23日、文化委員会主催の食育講座が開かれました。この講座は、農地を提供してくださる地域の方のご協力のもと、全7回シリーズとして進められています。

この日は松本一本ねぎの植え替え作業を行いました。伝統野菜である松本一本ねぎは、植え替えによって生まれる独特のカーブが特徴です。昔から受け継がれてきた大切な技法を、実際に手を動かしながら体験しました。

強い夏の日差しの中、親子連れから年長者まで集まり、交代で作業しながら和やかに汗を流しました。

宅地化の進んだ鎌田地区ではこうした体験はとても貴重です。

「両島なす」は幻のなす

肉厚で皮が薄くやわらかい特徴をもつ両島なす。品種は「千両二号」で特別なものではありません。それが特別なものになる理由は、両島を流れる豊富な地下水にあるようです。2mを超すなすの株の根が、常にその地下水を吸いあげていることが、やわらかくみずみずしい実の生る秘密だといいます。

また、人の嫌がる猛暑も、なすの生育にはよい環境になるそうで、今年も大きな実をつけていました。両島なすの農家も2軒のみとなり、手に入れることが大変難しくなっています。

おやきにしたぞ

20人が参加した9月2日の公民館のおやきづくり講座では、両島なすを使ったおやきを作りました。包丁も入りやすく、調理もしやすそうでした。試食のとき、なすの餡が口の中で溶けていく感じがたまらないとの感想も。一緒に食べた浅漬けも、皮がやわらかくて、まあ、ビックリ。

地区に誇れる産物があることは、私たちの誇りでもあります。